

---

---

# 旧山古志村救済文書資料の概要

原 直 史

(新潟大学人文学部)

---

## はじめに

日本においては、その社会のありかたに規定されて、近世から近代にかけての多くの文書資料が「家」という組織を単位として蓄積されてきた。しかし近年は、さまざまな理由からこうした文書資料が博物館・文書館・図書館等の公的機関に寄贈・寄託され、元あった家から離れて保存される例がますます多くなっている。そうしたなか、大震災のような大規模自然災害は、個々の家のみならず、こうした公的機関の施設にも甚大な被害を与え、安全な保存ができなくなる事態をもたらす。

本稿は、2004年（平成16）10月の新潟県中越地震において大きな被害を受けた旧山古志村（現長岡市山古志地域）において、自治体としての村が保管していた文書資料の救済の経緯と、その概要を報告することによって、こうした文書資料を地域の歴史を伝える記録として永く伝え活用していくための、いくつかの課題を展望しようとするものである。

## 1 自治体史編纂と文書資料

『山古志村史』の編集・刊行にあたって監修をつとめた佐藤誠朗新潟大学教授（当時）によれば、佐藤氏と山古志の文書資料との出会いは1971年（昭和46）のことであったという<sup>\*1</sup>。この時佐藤氏は、隣接する栃尾市の市史編纂事業の一環として山古志村を訪れ、当時既に山古志村種芋原支所<sup>たねすはら</sup>に保管されていた坂牧家文書を見せてもらう。坂牧家文書は、近世種芋原村の庄屋や近代種芋原村の戸長・村長を勤めた家の旧蔵文書群である。翌年から佐藤氏は栃尾市史編纂のメンバーや学生とともにこの坂牧家文書の整理に着手し、史料目録を作成した。

1977年（昭和52）『山古志村史』編纂事業がスタートし佐藤氏が監修をつとめることになった。77年と78年の夏には佐藤氏のもと多くの学生も参加して、「山古志中学校寄宿舎を根城に」村内外の近世・近代文書資料の悉皆調査が行われた。1978年にはその成果として先に整理が行われた坂牧家文書の分もあわせて全3巻の目録が印刷作成された<sup>\*2</sup>。

この後1979年の補充調査を経て1981年（昭和56）に2巻の史料編が刊行される。遅れていた民俗部門の調査執筆体制も1982年には調い、1983年には民俗編が刊行された。さらに1985年に通史編を刊行して、足かけ9年にわたった編纂事業は一応の完成を見た。

こうした経緯の中で、本稿で注目するのは、当初調査合宿の拠点となった山古志中学校寄宿舎が、収集された文書資料などの保管場所として機能していった点である。収集文書のうち個人所蔵文書などは順次返却された模様だが、先に触れた坂牧家文書や、1956年（昭和31）に合併成立した山古志村が旧4か村（種芋原村・太田村・竹沢村・東竹沢村）から引き継いだものも含めた行政文書な

ど、村所有の文書資料は、その後も長く寄宿舍に保管されていた。この寄宿舍は1987年（昭和62）に閉寮し寄宿舍としての役割を終えたが<sup>\*3</sup>、その後も村の文書資料保管施設としての役割を担ってきたのである。

なお、山古志村にはもうひとつ、文書資料が保管される施設が存在した。それは山古志村民俗資料館である。山古志村において1972（昭和47）から本格的に開始された民具収集活動の成果として、廃校となった池谷小学校第二校舎を利用して1975年に開館したのが、この山古志村民俗資料館であった<sup>\*4</sup>。その収蔵品の主体は民俗資料としての民具類であるが、後述するように若干の文書資料も受け入れていた。またいかなる経緯によるものかは未詳であるが、村史編纂に際して整理された村所有文書の一部も、またこの民俗資料館に保管されていた。

## 2 新潟県中越地震と文書資料の救済活動

2004年（平成16）10月23日夕刻の新潟県中越地震は、これら山古志村の文書資料保管施設に大きな被害を与えた。民俗資料館の民具類の大規模な救済活動については、マスコミ等の報道もあって広く知られているが、この救済活動と同時並行の形で、文書資料の救済活動も行われた。この救済活動についても、これまでいくつかの機会では報告されているので<sup>\*5</sup>、ここではそれらによりながら、簡単にその経緯をまとめておくことにする。

地震発生直後から様々な形で被災歴史資料等の救済活動が行われてきたが、12月に山古志村当局からの要請によって、山古志村の被災資料の救済活動が本格的にスタートした。下見の結果特に民俗資料館の民具の膨大さから、単独組織による活動は困難と判断されたため、「中越地域被災文化財救済委員会」が発足した。この委員会は最終的には新潟県立歴史博物館を核として新潟県教育庁文化行政課・山古志村民俗資料館（山古志村教育委員会、合併後は長岡市教育委員会山古志分室）・柏崎市立博物館・長岡市立科学博物館・長岡市立中央図書館文書資料室の6機関によって組織され、さらに実際の搬出・搬入作業に携わるボランティア募集等の面で、新潟大学に事務局を置く新潟歴史資料救済ネットワークとも連携しながら、活動が行われた。

このうち長岡市立中央図書館文書資料室では、山古志村の長岡市合併（2005年4月1日実施）が予定されていたこともあり、既に地震前の2004年8月に新潟県立文書館が実施した歴史資料所在調査に参加し、山古志中学校寄宿舍に保管されていた坂牧家文書等の現況を把握確認していた。こうした経緯から、救済活動は、民俗資料館の民具類とともに、中学校寄宿舍の文書資料も対象とすることとして計画された。

当初作業は12月23日に予定されていたが、大雪のために中止となり、翌春の雪解けを待たねばならないこととなった。実際の作業は2005年5月21日・22日の両日にわたって行われた。21日には主として山古志中学校寄宿舍からの搬出作業が行われた。この寄宿舍は鉄筋コンクリート製の建物であったが土台にひびが入り、窓も一部割れていた。特に文書資料が保管されていた部屋は、文書を収納していたスチール製のキャビネットが倒れてドアをふさいでいたため、割れたガラスを撤去した窓から中に入ってから作業となった。散乱した文書資料を段ボール箱に入れて2tトラックに積み込み、搬出した。

またこれと平行して民具類の搬出が行われていた民俗資料館にも旧村役場の文書資料が保管されていることが判明したため、これを大型乗用車等に分載して搬出した。さらにこの民俗資料館には、この他にも若干の文書資料、書籍類や新聞、屏風などが保管されていたが、紙類としてまとめよう

との判断から、これらも他の文書資料とあわせて移動・保管することとし、翌22日にこれらの搬出作業が行われた。

これら文書資料等は長岡市浦瀬町の長岡市役所浦瀬町倉庫に搬入した。その数は段ボール箱で272箱に上った（内訳は別表のとおり）。なおこの両日の作業には、長岡市立中央図書館文書資料室の職員を中心として、新潟県立歴史博物館・新潟県立文書館の職員に、かつて山古志村史編纂に加わったメンバーのボランティア参加も含めて、計12名が携わった。

こうして山古志村において村が所有・保管していた文書資料類は、長岡市役所浦瀬町倉庫に移動・保管されることになった。その後2005年度に燻蒸が実施されている。

旧山古志村より長岡市役所浦瀬町倉庫に移動した文書資料等

搬出日	搬出場所	資料	分量	備考
5月21日	山古志中学校寄宿舎	坂牧家文書	51箱	
		旧山古志村役場文書	121箱	
		その他	37箱	山古志村史編集資料、パネル展関係史料等
	山古志民俗資料館	旧山古志村役場文書	48箱	
5月22日	山古志民俗資料館	その他	15箱	新聞、屏風等
計			272箱	

金垣孝二「山古志地域の文書資料について」（『中越地域被災文化財救済委員会事業報告書』、2005）より（一部修正）

### 3 文書資料等の概要

以下では、この浦瀬町倉庫に移動し保管されている文書資料等について、特徴ある文書群毎に紹介する。但し資料一点ごとの調査を行ったわけではなく、段ボール箱毎にその概要を上から把握した結果に過ぎないので、粗い概要紹介に止まることをお断りしておきたい。

#### ・坂牧家文書

坂牧家文書は、先述した経緯からも旧山古志村地域でもっとも知られた文書群であり、質量共に充実した文書群である。現在浦瀬町倉庫に移された坂牧家文書は、大部分が「山古志村史編集委員会」のラベルが貼られ、同委員会の封筒に入れて整理されており、これは先述した同委員会作成の目録と対照させることができる。しかしながら、若干これと対照できないものが存在する。

ひとつは全く未整理の一群で、例えば近代の書簡類が段ボール箱と木箱にまとめられて1箱ずつ存在する。もうひとつは整理した形跡はあるものの目録と対照できない一群である。そしてこの後者は、他の坂牧家文書が保管されていた中学校寄宿舎ではなく、民俗資料館に保管されていたことに特徴がある。

これらがなぜ坂牧家文書と確認できるのかというと、ビニールひもによってまとめて括られ、そのすべてではないが多くには山古志村史編集委員会による「坂牧家文書」のラベルが貼られ、さらにラベルがないものも関連した同種の資料と判断されるからである。しかしラベルには分類記号や文書番号が記されておらず、したがって目録とも対照できない。

今回確認できたこうした括りはふた括りほどあるが、いずれも明治～大正期に長岡中学校や三条中学校の校長を歴任した坂牧善辰に関係する文書資料を主としている。目録に掲載済みの坂牧家文

書中にも善辰関係文書は存在するので、本来は同じ文書群に属していたものと思われる\*6。

またこうした善辰関係文書とともに、明治8年(1875)の種芋原村「田畑屋敷其外地絵図」という大判の絵図が計6葉括られている。この絵図にはラベルが付されていないものの、『坂牧文庫古文



写真1 「田畑屋敷其外地絵図」

書目録草案』\*7に記載があるので坂牧家文書に属するものであることは確実と思われるが、村史編集委員会の目録とはうまく対応しない\*8。

このように坂牧家文書には、村史編纂段階で未整理に終わったもの、整理に着手したが未完と思われるものが、若干存在することがわかる。期限を切って行われる自治体史編纂に伴う調査・整理では、このようなことはやむを得ないことであり、村史編集委員会の責とするにはあたらない。また、その後の経緯の中で坂牧家文

書はすべてが中学校寄宿舎に保管されてきたのではなく、その理由は不明だが一部は民俗資料館にも保管されてきたことも判明した\*9。こうした点を念頭に置いた上で、今後再調査・再整理が必要であるであろう。

#### ・旧村役場文書

旧村役場文書は中学校寄宿舎と民俗資料館にわかれて保管されていた。このうち民俗資料館に保管されていたものは、村史編集委員会の封筒やラベルに押されたゴム印から、主として合併以前の旧東竹沢村から引き継がれたものであると判断される。これについては、一部を抽出して確認した限りでは、村史編集委員会の目録とラベルの番号で対照可能であるようだが、中には対照ができないものも存在する。

例えば「使丁心得」と題した木札が存在するが、それは次のような資料である。

使丁心得  
一 軍事の御用は重大なれば大切に  
とりあつかへ遺失汚損せざるよふ心附  
け又途中にて不都合の行為なきよふ  
心得へし

二 此用事は大いそぎなれば一時間に  
一里半(山坂ハ約一里)の割合にてあ  
ゆむべし

三 此令状を先方へわたしたるときハ  
右方にある受取書を切取り之れに渡したる月日時時刻を記し印を押させて持ちかへるべし若し  
代人にわたしたるときハ其ものの名前を記し印を求むべし

四 若し途中にて病氣等のため用事を達すこと出来ずと思ふときハ人をたのみて其旨を役場へ  
急報し代人を請ふへし勝手に人を代ることをゆるさず



写真2 東竹沢村「使丁心得」

東竹沢村役場(朱角印・印文「新潟県古志郡東竹沢村役場」)

これは徴兵の召集令状を届ける村の使丁に示された心得書である。ルビの表現法や変体仮名の多

用から明治期のものと推測される。末尾の「東竹沢村」が墨書される以外は印刷されており、多くの村で同時に同文の心得が示されたものと思われるが、それでもこの木札を懐に入れて、山道を急ぎ足で行き来した東竹沢村の使丁の姿が目浮かぶような、興味深い資料である。しかしこの資料に村史編集委員会のラベルは貼られておらず、目録にも該当する資料を見いだすことが出来ない。

一方で旧東竹沢村以外の役場文書は中学校寄宿舎に保管されていたが、ここでも目録との対照に一部困難が生じる。実は村史編集委員会の目録には、山古志村合併成立以前の旧4か村それぞれの役場文書が載せられているが、山古志村成立以後の「山古志村役場文書」については載せられていない。しかし寄宿舎に保管されていた役場文書の中には、昭和40年代など合併以後の村役場文書も存在し、これらには編集委員会のラベルが付され、資料番号も記されているのである。従ってこれらについては印刷されていない目録が存在するものと思われるが、現在のところそれは確認できていない。



写真 3 種芋原村役場文書

また「竹沢村文書」等と封筒やラベルに記されている資料についても、資料番号について目録と対照できないものがかなり存在する。これらは、1978年（昭和53）の3冊の目録印刷後も調査・整理が継続されたことによると思われる。後述の村史編纂関係資料の調査とあわせて、再度整理が必要であろう。

さらに村史段階で整理された形跡が見られない役場文書もわずかであるが存在する。それは民俗資料館に保管されていた種芋原村役場文書で、段ボール箱ひと箱分である。この中には明治期から

昭和20年代に至る、「土地名寄集計簿」や「歳出簿」などの簿冊と茶封筒にまとめられた文書とが含まれるが、いずれもラベル等は付されておらず、村史編集委員会の目録にも該当資料は見いだすことが出来ない。

#### ・村史編纂関係資料

中学校寄宿舎には、編集委員とのやりとりの記録など、村史編纂に関わって作成された諸資料がまとまって残されていた。今後こうした資料の中から、印刷されていない新しい段階の目録が出てくる可能性も高い。なお、これらのなかに若干であるが未返却のままとなっていた個人所有文書が見いだせる。

また、栃尾市史編纂時点でまず作成された坂牧家文書目録の写しが、民俗資料館から搬出した資料の中に含まれていた。

#### ・坂牧清作家文書

民俗資料館には村史編纂にともなう整理を経ていないと思われる文書資料がいくつか保管されていた。坂牧清作家文書はそのうちのひとつである。坂牧清作家は種芋原にあったが、先に触れた坂牧家文書の旧庄屋家とは異なる家と判断される。

現在確認できているのはふたつのまとまりに分かれた文書群である。ひとつは細長い木箱に収められたもので、明治41年度（1908）「大福覚帳」などいくつかの冊子形文書資料が、文書以外のモ

ノ資料と共に入れられている。このまとまりには「坂牧清作古文書 56.7.16」と書かれた荷札が括り付けられており、1981年（昭和56）に資料館に受け入れたものであろうことが推測できる。

もうひとつのまとまりは懸硯様の小箆筒で、中には大正11年（1922）の「古物買売交換明細簿」や「帝国在郷軍人会新潟県古志郡種芋原村分会 分会長坂牧清作」の名刺などが各種の小冊子などと共に収められている。



写真4 坂牧清作家文書



写真5 種芋原小川家文書

#### ・種芋原小川家文書

これも民俗資料館に保管されていた文書群である。多くの和綴本と共に木箱に収められているが、文書資料は上から確認できる限り主としてさらに薄い木箱に入れられている。近世期の文書は横冊の香典帳類と一紙ものの土地証文、さらに明治期の地券が確認できる。これらにみられる当主名は近世期では八左衛門、長兵衛など、また地券の名義は小川平太となっている。この薄い木箱の蓋にも「小川平太扣」という墨書があり、また小川平太の名は他の和綴本に付された墨書にもみることができる。なお地券や土地証文の記載から、この小川家は種芋原に所在したと判断される。

#### ・星野定夫家文書・大久保川上家文書

民俗資料館に散乱していた和綴本類をまとめて搬出した段ボールの中に、明治37年（1904）に星野定次郎が記した「機業講習筆記」2冊を確認できる。このうちの1冊には「星野定夫 56.4.27」と記した荷札が付けられており、定次郎の子孫にあたる星野定夫家から1981年（昭和56）に受け入れたものであろうことが推測できる。また同じ段ボールの中にある「金ヶ森道西記」などの写本数点には、「大久保邑川上九之助」「大久保村九之助持主」などの記載が見られ、大久保の川上家より受け入れられたものが含まれていることを推測することができる。

#### ・その他書籍類

この他民俗資料館からは、ごく近年のパンフレット類も含む多くの書籍類が搬出された。このうちややまとまったものとしては、木箱におさめられた教科書があり、「小池多七（桂谷） 小学校教科書40冊 大正～昭和初期のもの」と記した荷札が付されていることから、桂谷の小池多七家から資料館に受け入れられたものであることが判明する。また「小川平太」等の墨書を持つ書籍類が収められた木箱もあり、上述した小川家文書のまとまりと同一出所である可能性が高い。

一方中学校寄宿舎からも若干の書籍類が搬出された。このうちには「種芋原村佐藤久左衛門」の名が記された和綴の版本・写本類、「小池甚三郎」・「竹沢高等小学三学年小池彦一」の名が記された

教科書類などが確認できる。また昭和 17 年（1942）頃のグラフ雑誌『写真週報』の束の中には、「高橋茂登一」の名が記された手帳ケースが挟まっている。これらの記載はこうした書籍類の出所を判断する材料となるであろう。

#### ・新聞

民俗資料館にはかなり大量の新聞が保管されていた。確認できたのは昭和 17 年（1942）から 20 年代にかけての東京日々新聞・毎日新聞などであるが、一部には明治 25 年（1891）頃の朝野新聞などかなり古いものもみられる。

#### ・佐藤久村長関係資料

1964 年（昭和 39）より 4 期 16 年にわたって村長をつとめた佐藤久氏の関係資料が、民俗資料館に保管されていた。佐藤氏に宛てた葉書・書簡と多くの人びとの名刺が収められた段ボール箱 2 箱である。確認できた限りでの葉書・書簡類の消印期日は 1964 年～72 年で、これは佐藤村政の第一期・第二期に該当する。これはおそらく佐藤氏が村長の公務の中で受け取った書簡類で、名刺もまた佐藤氏が公務に関係して受け取ったものであろう。名刺には詳細なメモが書かれているものも多い。



写真 6 佐藤久村長関係資料



写真 7 牛の角突き関係資料

#### ・牛の角突き関係資料

民俗資料館に保管されていた資料の中に、「昭和五十三年六月十八日 文化財指定記念 記念牛の角突き関係書類在中」と書かれた山古志村役場の茶封筒に入れられた、ひとまとまりの資料が存在する。これはこの 1978 年（昭和 53）5 月 24 日付けで「牛の角突きの習俗」が国の重要無形民俗文化財に指定されたことを記念して開催された式典と、記念角突きに関する一括資料で、当日の予定表や記念式典で読まれた祝辞、出席者名簿などが含まれている。

またこの他牛の角突きに関係した資料としては、「習俗保存テキスト作成資料在中 55.3.1 資料館保存」と朱書され、「二十村郷牛の角突き習俗保存会」のゴム印が捺された山古志村役場の茶封筒に入れられた一括資料が確認できる。

この 1970 年代後半から 80 年頃にかけての時期の山古志村民俗資料館では、日本観光文化研究所の須藤護氏を中心となり、資料館の収蔵資料の充実と牛の角突き習俗の記録保存を両輪として、精力的な活動が繰り広げられていた<sup>\*10</sup>。これらの資料はまさにそうした時期の記録であるが、この他にも民俗資料館から搬出された文書資料の中に、当時の活発な活動の記録が含まれている可能性は高い。

## おわりに

最後にこれらの文書資料の現況からみられる特徴をまとめながら、若干の課題を展望して本稿の締めくくりとしたい。

本稿では目録等と対照できない新知見を中心に記述したため、その点のみが強調された嫌いがあるが、全体としてこの救済活動で搬出された文書資料の大部分は、村史編纂の過程で整理された形が良く残されており、震災そのものによる資料へのダメージも軽微である。その点では村史編集委員会作成の目録を用いた管理・活用は現時点で十分に可能であると判断される。

しかしながら坂牧家文書や旧村役場文書においても、若干であるが整理が未完のもの、うまく目録と対照できないものが存在する。これらについては、村史編纂時の整理を尊重しその経緯を確認しつつ、再整理・追加整理が必要になるであろう。その際には今回共に搬出された村史編纂関係資料の整理もあわせて行われることが望ましい。

さらに民俗資料館に保管されていたものを中心として、村史編纂時に視野に入っていなかったと思われる資料群も存在する。これらのうちいくつかは、荷札等からその出所や受け入れ時期が判明し、現在確認できるその時期は村史の史料編が刊行され史料収集作業が一段落した 1981 年（昭和 56）に集中していることも興味深い。しかしこのような出所や受け入れ時期の判明につながる情報はきわめて少ない。この点を考慮に入れた慎重な作業が求められるであろう。

またかつての民俗資料館自体の活動に関わる資料の存在も重要である。今回の救出活動では、紙媒体をまとめるという観点から、こうした資料も収蔵民具類と分かれて浦瀬町倉庫に搬入された。しかし現在なお継続中である収蔵民具類の整理作業とも有機的に関わらせながら、これらの資料を整理・活用していくことは、将来のあるべき民俗資料保存公開施設を構想していく上でも、重要な意義を持つのではないだろうか。

以上から、今後の課題は、村史編纂事業の経緯を念頭に置いた再整理・補充整理、出所確認を含むあらたな資料整理、民具類の整理と連携した作業、の 3 点にまとめられるであろう。

文書などいわゆる記録史料の保存と管理において、「出所原則」「原秩序尊重原則」が我が国でも周知のものとなり、出所や原秩序が文書群の性格を理解するための重要な情報であるとの認識が一般化して既に久しい<sup>11</sup>。それぞれの家で保存されている限り自明のものであった出所は、公的機関に受け入れられたとたん自明のものではなくなる。整理の過程で記録を残さない限り原秩序も攪乱される。公的機関に受け入れられた文書史料は、本質的に本来の性格を理解する情報から遮断される危険を孕んでいるのである。さらにこうした公的機関が災害で被災すると、文書資料そのものの被害に加えて、散乱と時を急ぐ持ち出し作業によるさらなる攪乱、整理記録の滅失等々により、こうした危険が一気に顕在化する。今回確認した文書資料の現況は、そうしたありさまをありありと示しているように思える。

また一般に時期を区切って行われる自治体史編纂事業では、史料編・通史編の刊行をもって事業が終了すると、収集した原文書も含めて様々な記録が充分に活用される術を持たないまま、死蔵されていく例が少なくない。ことに専門の職員を配置する余裕のない小規模自治体ではそうした傾向が強い。また、本来長く資料の保存活用を担っていくべき資料館のような施設ですら、当初は精力的であった活動が低調になったり、ある時期からほとんど倉庫としてしか機能しなくなる例もある。被災以前の山古志村の文書資料についても、程度の差はあれ少なからずそうした傾向につながる面を持っていたことは否めないように思われる。

今回確認した文書資料の整理作業にあたっては、整理そのものの作業と平行して、これらの問題点を念頭に置いた上で、地域において永く文書資料を伝え活用していくための良い手だてを構想していく作業も、是非あわせて行っていくことが望ましいであろう。

現在これらの文書資料を管理している長岡市立中央図書館文書資料室では、資料整理ボランティア等を活用しながらこれら旧山古志村から救済された文書資料の整理作業を行うことも検討しておられる由である。しかし同資料室にはこの文書資料のみならず、2004年（平成16）の7.13水害、新潟県中越地震、さらには2007年の新潟県中越沖地震の被災資料をはじめとした市内各地の個人所蔵文書資料等が多数受け入れられており、割ける人的資源はどうしても限られてくるであろう。

しかし幸いこれまでの被災資料救済活動の中で、さきに触れた中越地域被災文化財救済委員会や新潟歴史資料救済ネットワークなどの、組織を超えた連携の実績が積み重ねられてきた。また村史編纂事業や民俗資料館の開館は1970年代後半から1980年代前半とそれほど古い過去のことではなく、関係者の方々の中には惜しくも鬼籍に入られた方も居られるものの、まだまだ多くの方がご健在である<sup>\*12</sup>。こうした各方面の連携を最大限に活用することで、長期的な展望をもちながら、これらの文書資料を整理し、永く保存・活用できる手だてを作り出すことは、必ずや成し遂げられると考える。

大きな災害を蒙りながらも山古志の地に戻り、その地で生活を再建されることを選んだ方々、またやむを得ず山古志の地を離れたが、ふるさと山古志への愛着を持ち続ける方々にとって、こうした文書資料などの歴史資料が、地域の歴史をたどりアイデンティティーを確認していく、精神的よりどころとなることを心から願い、また自らも微力ながら息長く関わっていこうと決意を新たにす次第である。

\*1 以下、佐藤誠朗「はじめに」『山古志村史 史料1』（1981、山古志村役場）による

\*2 山古志村史編集委員会『山古志村史料目録』第1集～第3集。これは公刊されたものでなく、関係者に配布された内部資料である。

\*3 長岡市立山古志中学校 HP <http://www.kome100.ne.jp/yamakoshi-jhs/>

\*4 飯島康夫「山古志村民俗資料館と収蔵民具」（『災害と資料』1、2007）

\*5 金垣孝二「山古志地域の文書資料について」（『中越地域被災文化財救済委員会事業報告書』、2005）など

\*6 例えば同じ三条中学校の修身科答案綴りが、年度やクラス毎に目録掲載の坂牧家文書とこの括りとに分かれて存在する等の事例が見られる。

\*7 郷土史家であった山屋茂作氏によって作成された謄写版刷りの冊子。山屋氏の緒言に年月日が記されているが、管見のものは印刷が悪く判読が困難なので、作成年代は今のところ不詳であるが、昭和20年代ではないかと推察される。

\*8 目録には近代史料のX絵図に「田畑屋敷其外絵図」があり、年代は明治8、数量は1と記されるが、表題がやや異なり数量も違う。しかしこの目録に対応する番号の資料は現在坂牧家文書中に確認できない。この点についてはなお検討課題である。

\*9 この点については、民俗資料館でのなんらかの活動に伴って持ち出されたものとみるのが自然であろう。ただし救出活動における浦瀬町倉庫への搬入・配架の時点で、中学校寄宿舎から搬出された段ボールと民俗資料館から搬出された段ボールが混在してしまうような事態が、まったくありえなかったかという点を、前提として確認しておく必要もあろう。今後そうした点も考慮に入れつつ検証していくべきである。

\*10 前掲飯島論文

\*11 早い時期の紹介例として大藤修・安藤正人『史料保存と文書館学』（1986、吉川弘文館）など

\*12 本来であれば本稿作成にあたりこれらの方々への聞き取りも行うべきであったが、今回はまず文書資料の現況を確認した結果のみの報告となった。聞き取りによって解決する疑問点や、私が誤解している点なども多々あると思われる。今後の課題であると共に、関係各位のご叱正をお願いする次第である。

（付記） 長岡市役所浦瀬町倉庫保管文書資料は、長岡市教育委員会山古志分室が所蔵の主体となっており、同分室には今回の調査にあたり快くご承諾いただきました。また実際の概要確認にあたっては、長岡市立中央図書館文書資料室の金垣孝二・小林良子・田中洋史の各氏にお世話になりました。多忙な業務の合間を縫って対応していただいた各氏に対し、末筆ながら記して感謝申し上げます。

なお、本稿脱稿後、長岡市教育委員会山古志分室の高橋純治氏より、村史編纂時の史料調査やその後の保管の経緯について、いくつかのご教示をいただきました。本来ならばその内容を反映させて改稿をするべきですが、時間的余裕もないことから、他日あらためてご紹介する機会をもちたいと思います。